ら出て來て居るのです。狂言全體は必ずしも一つの時代に出來たのでもなく、又一人の手で成つたのでもないから、確としたことは言へませぬが、要するに狂言は中々古くて、そして價の有るものだと云ふことは認めてやらなければならぬのです。

又それ等と凡そ同時代若くは近い時代に、外に可笑いものが無いかと云ふと、無いことはございませぬ。それは鴉鷺合戰物語などの類です。鴉鷺合戰物語は鳥の喧嘩を書いたもので、下らぬ話ではありますが、一面には諷刺を含んでゐて、そして可笑いには違ないのです。鳥同士鬪つて泣いたり笑つたりして居るのでございます。是も矢張出來た時代は狂言の出來たのと近い時代でありまして、何しろ徳川以前のものでございます。此の種類も血統を引いて後世に遺つて居りまして、日本人には餘程氣に入つたものと見えます。それですから後には臺所道具が合戰をしたり、青物と魚類と鬪つたりするやうなものが澤山出來て居ります。しかし是等は滑稽と云ふ事から論ずると、可笑いには相違ありませぬが、餘り價の有るものとは如何に贔屓目に見ても云へぬのであります。

又それから蟲の歌合などがございます。是は種々の蟲が歌を詠む、判者も蟲でやるのでして、

是も作者の細工のうまいところを見せると云ふだけに止つて居るので、別段感心する譯にいきませぬ。是も後に其の系統を引いて、魚鳥歌合などが出來て居ります。

又尙それとは聊違ひまするが、柿本の系圖などといふ、柿を人にして書いて見た系圖などがあります。是等も後の黃表紙といふものに影響して居るのではないかと疑はれます。しかし何もひどく面白いと云ふ譯にはいかぬものであります。

別に又歌の下の句上の句の付合、卽ち歌の本を出して末を附けさせる、又末を出して本を附けさせる。殊に一寸附けにくい妙なのを出してさうして、他のものに附けさせて、旨くそれが出來ると可笑味になる。附けられぬやうな無理なものを工夫するから、自然と其の答が可笑くなつて來るのであります。いろ〳〵の歌書にも、亦一家の集——散木集などにも澤山其例は見えて居ますが、斯う云ふことで笑を催す、それが源平頃から段々多くなつて居るので、さう云ふものが段々發達して來て、後に一種の狂歌語と云ふやうな種類の可笑味のものが出てまゐるに至りました。ずつと後になつて出ました曾呂利狂歌話とか云ふやうな種類のものは、皆そこから系統を引いて居るものと考へられるのです。

それで德川時代になりましてはずつと變化して來まして、さうして總てのものが發達して來ますに連れて、可笑味專門のものも出來て來たのです。名高い醒醉笑などと云ふものは、二百七八十年も前のものでありますが、先可笑味專門の本としては古くて割合に能く出來て居るのです。其の中に含んで居る所の話も、前々から系統を引いた竹取以來の駄洒落もありますが、そればかりではなくて大分性質の好いものもあります。しかしまた竹取以來の惡いのも多いのです。例へば河内の國に「ちん」と云ふ者が居つて、大和の國に「ば」と云ふ者が居つた。いづれも有名な劍術遣で、雙方仕合を仕て片股づつを切り取りつ切り取られつした。それで外科醫者が來て治療した所が、誤つて「ちん」の片股を「ば」の方へ附け「ば」の方のを「ちん」へ附けた、それ故長し短しになつて、をかしくなつた。「ちんば」といふ事はこれより始まりける、といふ落になる話などがあります。誠に可笑味は淺薄でありますが、併し是は竹取傳來の中々古いもので、日本人が大好きなのでしやうから仕方がありません。新しく出て來た可笑味の中には、一寸工合の良いのもあります。前のは惡い例ですが、性の良いのを申しますれば、長い棒を子供が振廻して居るから、何をして居るのかと聞くと、アノ星さんが綺麗だから落さうと思つて居ると云ふと、其處で

はとゞくまいから、屋根へ登つてやれ、といふのがあります。この話は誰でも知つて居る話ですが、是等も醒醉笑中の話で二百何十年前に出來て居る話で、まことによく出來て居る話です。

醒醉笑などが先可笑い短い話を集めたものの一番始りであつて、性質に於ても寧良いものを含んで居りますが、其の後段々と似たものが出來て居ります。元祿あたりへ來ては鹿の卷筆とか鹿の子話とか、輕口男とか種々の種類のものが澤山に出來てまゐりました。併し名ある作者で可笑いものを書いて居ると云ふのが餘り見當りませぬ。尤此の鹿の卷筆とか、それからすこし後の露が話とか云ふのは、作者も知れて居り、書の名も人に知られて居りますが、要するにそれッきりの話で、是と云つて珍重する程のものもありませぬ。

そこで其の時分には他の方面はどうかと云ふと、他の方面は元祿には發達して居りました。小說戲曲では西鶴も居りますし近松も出ましたし、又俳諧の方では芭蕉なども出ました。それでありながら、可笑味の方へ行くと、今申した僅のものだけで別にこれと云ふ人のこれといふ著述もありませぬ。

唯西鶴名殘の友は隨分可笑い話ばかりを集めたもので、是は五卷ありまして、總て滑稽で埋め

て居ると云つても宜いのです。併し要するに短話で理想的の滑稽文學でもなく、一つ話が長く續いて居るのではありませぬ。けれども單に星を落すと云ふやうな一口噺的の小い話でもありませぬ、大分趣味も有るし人情のあるやうに書いてあります。其の中の可笑いのを申して見まするかういふのがあります。或時人々が宇治へ遊びに行つた、さうすると其の頃の浪人で山名外見と云ふ武張つた者があつて、此の者が矢張宇治へまゐりました。所が丁度雨降揚句で宇治川は水嵩増つて壯な景色であります。人々は其の景色を見て、かう云ふ所も昔の人は、戰の時に馬に乘つて渡つたのだが、と云ふ話をして居りまするとと、外見と云ふ浪人は頗る武術自慢なので、それでは一番乃公が渡つて見せてやらう、今の人だつて此の位の川が渡れぬことはないからと云ひます。いやそれは止した方が宜からうと云ふと、なに是しきの川を渡れぬことはないと云うて、强情に馬を乘入れましたが、とう〳〵浮きつ沈みつして向の岸へ上りました。そこで衆人は皆驚きます、自分も大威張に威張つて居る。昔の梶原佐々木と雖たゞの人である、オホン〳〵と力んで居ると、川のふちに居た婆さんが、昔の佐々木梶原の時は、鎧を著て弓矢を持つた敵が一ぱいに居りました、といふ話があります。是は一寸聞くと可笑くはないのですが、其の景色といひ、變な

浪人の威張る樣子といひ、それ等を考へ合せて見ると無限の興味があるではございませんか。是等は上品な面白い出來のものと言はなければなりませぬ。此の名殘の友五卷は斯う云ふ種類の一寸した話を集めたのであるが、其を味つて見れば面白味があります。元祿には尙其の外に前に擧げました鹿の子話とか、或は輕口男とかいふものの類を揭定すれば大分あります。一つ鹿の子話の中の御話を擧げませう。何かゴト〳〵音がするので、行つて見ると、盜人が壁を壞して手を入れて居るのです。そこで女房を呼んで、泥棒が來た、其處にある錢二百文出せ、先方も一生懸命になつて取りに來たのだらう、まるでやらぬでも可哀想だ、又此方も持つて居るものを皆取られても困るから、二百文やつて利害を說いてやらうと、貴樣も折角やつて來たのだから、何も取らないのは損だらう、併し乃公の方も澤山やつては損だから、兩方少しづつの損で我慢をする事にしやうと云ふので、二百文やりまするとと、泥棒は其の儘歸つて仕舞ひましたが、又少し經つと手を出しました。いや斯う度々出されては叶はぬから脇差を持つて來いと亭主も怒りますと、盜人がさう度々戴きに出たのではございませぬ、先刻は誠に有難うございます、是は甚少々ばかりでございますが、御子供衆に、と申しますので、見ると手の上に紙に包んだ僅ばかりの菓子を持つ

て居つたと云ふのです。馬鹿氣た話ではありますが、唯單に駄洒落と云ふではありませぬ、一寸おもしろいのです。

輕口男などと云ふのも矢張其の通で、是れも內容は良いのもあるし惡いのもあります。輕口男の中にある話ですが、或男が佛を信じて長年精進堅固にやつて居たが、不圖魚を食出した所が旨くつて堪らぬ、そこで佛前に向つて言ふのに、佛樣、私長年の間精進をして居りましたけれども是れから魚を食はうと思ひまする、付てはたゞ食べても惡いから御斷り申上げまするが、若魚を食つて惡いと云ふなら御叱り下さい、宜いと云ふならば御默りなすつて居らつして下されば宜しうございますと云つて、魚を食つたと云ふのです。是も僅のことでありまするが、其の中を味つて見ると上等の可笑味を含んで居ります。是等の類の著述は元祿あたりには大分あるであらうと思ひます。

併しそれから後はどうかと云ふと、それからずつと後に來て寶永あたりになつても、矢張さう云つた調子のものがございます。寶永あたりには、かすいち頓作話などと云ふのが五卷ありまして、其の外にも猶さう云ふものが多少あるのです。此のかすいち頓作話の中にあるので、よく

其の後の著述などに出て居る話があります。床の間に達磨の掛物が掛つて居るのを見て、人々が是は誰の畫だらう、是は雪舟だらう是は探幽だらうと種々のことを云つて居ると、其の中の一人が分別らしい顏をして、私が考へまするに、是は矢張達磨でござらうと言つたといふのがあります。斯う云ふやうなものを澤山含んで居る。斯う云ふ性質の佳い短い話は其の前のものにも澤山あるのでありますが、先醒醉笑あたりからかう云ふものが一畑續いて居るものと見て宜しいのでございます。其の前の駄洒落式のものとは、まるで系統を別にして仕舞つて居るといつても宜いのです。

扨さう云ふ短い話は別にひどく頭を惱さぬでも出來ることでありますし、又實際にもチョイチョイ起ることでありますし、又我々の祖先も、元來が笑ふことのそんなに嫌ひでない人間と見えまして、さう云ふ種類の話の書は年々に多くなりました。そこで或作者が拵へ、或本屋が出版するばかりでなく、遂には小賢しい者は、丁度今日新聞でいろ〳〵の俳句とか狂歌とかを、募るやうに、大阪あたりでは百五十年位も前から、或はもう少し前から滑稽の笑話を募ることをはじめました。さうすると諸方の人が面白いと思つた事を寄せる、其の中幾らか良いものを取り惡いも

のを捨てて、少しばかり文才の有る人が修飾をして出版をすると云ふことになりました。これは百五十年位も前からであらうと私は推察いたしますが、併しまだそれは確とした事は言へませぬ。兎に角百數十年前より大阪或は京都あたりに其事が行はれたのは事實です。

それから寛政あたりになりましては話相撲と云ふものがございましたが、それ等がはじまりました時は、既にさう云ふものが進歩をしたので、そこで相撲のやうに甲乙を組合せて出すやうになつたのです。又天明度になりましては、江戸の作者の京傳だの一九などに判者をさせて、話の善惡を言はせたのや、或は又何の批評もなく集めたものをも出版して居りまする。此風は江戸へも傳はりました。矢張百年位も前のことでございます。確とした事は申されませぬが、江戸の方が少し京阪より後であらうかと思ひます。とにかく今を去ること百年前頃からして、ボツ〳〵江戸でも多くの人の話を募つて本にすることをしたやうでございます。で其の類の書は多く殘つて居ります。しかし天明前の京阪の此類のものの其の性質は、要するに皆前の元祿あたりのものに勝るといふほどでもないやうです。

斯う云ふ種類の方を今暫く措きまして、天明の前後の所で、外の方面でどんな可笑味のあるも

のが出て居るかと云ふと、又別に一種新しいものが出來てまゐりました。それは何かと云ふと、先達饗庭篁村君が校訂して出されました志道軒傳とか、或は田舍莊子とか、和莊兵衛とか、或は田舍一休とか、或は馬琴の夢想兵衛とか云ふやうなものが一畑起つて來ました。是は今までの唯單に短い話だけで笑を取るのとは違つて、全體に於て大く笑の網を張るやうなやり方で、此等の書のやり方は皆似寄つたものであります。褒めて言へば訓誡的、諷刺的のもので、大く輪を掛けて可笑味を取つたものであります。併し此の中で先私の考では和莊兵衛或は夢想兵衛ぐらゐを除いては左程良いものは無いやうでございます。此の和莊兵衛の中に、いつの世でも女房が產をする時にあたつては惱み苦む、其の時男は平氣ですまして居る、さうすると女房には不平無き能はずでございまする。其處を捉へて面白く書いて居りますが、ある國では女房が產をする時に亭主が非常に苦むのでありまして、亭主の苦みが足らぬと子供が生れぬ、そこで、おまへさんの苦みやうが足らないので生れないと云つて、女房が亭主を叱ることなどが書いてあります。是等はまことに空想的で、しかも其の反面には實際を含んで居る面白い出來のものでございます。斯う云ふ種類のもの譬喩的のものは、近頃は頓と絕えて居るのでございますが、大分往時にはあるやう

でございます。

此の外に前の鴉鷺合戰の物語の方の系統を引いて居るもので、寢覺鐵砲だのなんどと云ふのがあります。寢ざめ鐵砲は蟲の戀をする話を書いたので、是はずつと後に出て居る臺所合戰の類と一つのものでありますが、幾らか優美に出來て居るのであります。かくの如き何の合戰彼の合戰と云つて、器物や鳥獸などを人間に見立てて取扱ふのは大變流行つたものでございます、近頃石井研堂君が校訂して帝國文庫の中にもさう云ふものを集めたのを出されましたが、その外にまだどの位あるか知れません。これは一面には新聞紙といふものの無い時代にあつて、新聞紙的の働をおどけの中に少しはつとめたやうな形があります。例へば安政の年間に大い地震がありました、其時分には地震を鯰の仕業として居りますから、前太平記をこぢつけて鯰太平記として、鯰が怒つてどうとか云ふ働をしたと云ふことを書いたものがあります。詰り一事件がある度毎にさう云ふものが幾種か出來たと察せられまする。さう云ふ片々たる馬鹿氣たものの當時出版された體裁やなんどは、幸にそれらを蒐めて書物にしてある噺の尻馬なんどといふものがありますからよくわかりますが、畢竟皆見るに足らぬもので、文學上に於ては一顧する價も無いのであります。

それで天明前後に於て注意すべきことは、漢學者が其前は唯單に眞面目な支那のもの——古文的の物ばかり讀んで居つたので、法律と、程朱の書と、禪宗の語錄類の書を外にしては、殆ど俗語の書を讀まなかつたらしいのです。特に民間の詰らぬものはそれ程に漢學者は讀まない傾が有つたのです。所が天明前後になつては、岡白駒や岡島冠山などが支那の小說などを讀んで來て、段々それ等の讀方などに付ても敎へたりなど致しました。又語學上の必要から、長崎の通辭の吉尾氏なども、俗書を讀みもし讀ませもした。それで今までは多くさう云ふものは我が邦へ入つて來なかつたのですが、天明前後からしてさう云ふものが段々入つて來ました。何か新しいものが入つて來れば、必ずそれで幾らかの風も起り浪も動く道理でございますから、大分笑話の上に付ても變化は生じて來ました。しかし察するにどう云ふ本が當時に影響を與へたかと云ふと、何もこれといふ大したものが影響を與へたのではないらしいのです。支那の方では通俗の詰らぬ書、日本で謂ふ節用のやうな種類の本の中にも、幾らも短い可笑味の話が書いてあります位です。ですから笑林廣記や解頤集をほかにしましたところで、支那の笑話はいくらでも流行つて來る路があるのです。そこでポツリポツリと此方へ支那の小說雜書などと共に一緒に笑話が入つて

來たものでしやう。それですから天明あたりに至つては――天明は又一切に於て元祿に對して一風の光彩を放つて居るのですが、笑話の上に於ても元祿とは幾らか違つた光彩を放つて居るやうであります。一々例を申上げる譯にはいきませぬし、殊に新しい話でございますから、皆さんも御承知のことでございませうから、一々申上げは致しませぬが、抽象的に申せば鋭さが加はつて居りまする。元祿あたりは何となく鈍いが、天明になるとずつと鋭くなつて居ります。

さて又天明にはどう云ふ人々が重に可笑味のものをやつて居るかと云ふと、天明前後には先喜三二です。是は黄表紙の方の作者として最も大頭でございます。此の喜三二の里のなまりなど云ふのは、一卷悉く笑話の短いのを以て埋めて居るので、しかも最も傑作として後の人にも賞讃されて居りまする。此の喜三二よりして後、或は焉馬であるとか、馬琴であるとか、一九であるとか、或は又慈悲成であるとか、振鷺亭であるとか、或は三馬であるとか、是等は相應に種々なるものを拵へて居りまする。京傳はあれだけの才子でありましたが、どう云ふものか京傳の作つた落し話とか、笑話とか云ふものは多くは無いやうです。勿論別に京傳は他の方面で可笑味の作を澤山遺して居りますが、笑話の方にかけては、其の挿繪に對して署名したのは見受けますが、作

に對して署名したのは無いやうです。それで此の時分の話と云ふものは、皆前々とは違つて鋭くなつて居ります。馬琴の如きは斯う云ふ事に付ては餘才の無い人で、殘念ながら斯う云ふ事に付ては別に評論するに足るほどのものを出して居りませぬ。いや馬琴は實は斯う云ふ事で評論さるべき人ではないのでございます。ですから馬琴の作は、要するに斯う云ふ方面に於ては皆佳作でありません。さゆ物語がいい位のもので、其の他には偶〻可笑いのがあつても、それは言葉の手づまに止る位のもので、是と云つて感心するものは殘念ながら無いのです。其の時分に最も餘計笑話の本を作つて居るのは焉馬でございます。此の焉馬と云ふ人は、世才は澤山あつたかと思はれるのですが、其の作つた書を見ると剽竊若くは燒直しがあるやうです。或は弟子、知人などの作つたものは其の儘持つて來て排列したりして居ります。前に京阪で話を募ることが行はれて、其の風が江戸にも移つたと申しましたが、此の焉馬あたりになりますると、盛に自分の作でないものを餘計集めて、會などを拵へて大勢に話を持寄らせて、其の中から撰出して出版致して居るやうです。詰り當人の功は少いやうだと思ふのであります。一九は樂天家で極樂とんぼでありますから、むやみに種々のものを作つて居りますが、此人が品格のよい可笑味を著作の標的に

して居らぬのは、此人全體の性癖で、餘儀ない事です。慈悲成と云ふのには幾らも作はありません。併しどうも是と云つて賞める譯にもいかず、又振鷺亭と云ふのも甚しく賞讃する譯にもいかぬやうです。併し短話を個人に就いて論ずるのは、畢竟ずるに難儀です。個人に就いて論ずると、是等の名ある人も必ずしも旨い作を出さないやうですが、短い話のことでありますから、誰が作るともなく出來る話があるのでして、それ等の方が面白く、爲に天明度には好い話があるのかと考へまする、振鷺亭と云ふのは、此方の方には馬琴が居り、彼方の方には京傳が居つて、其の間に出たやうな人で、何へもひどく拔けると云ふやうな才が無い爲に、何でもやつて居りますが、何でも大した成功はしないで、話にも矢張大した成功はして居らぬやうです。併し兎に角此人にも「もゝん雅話」とか或は「噺日記」とか云ふやうなものがありまして、當時のそれ等の人並にはやつて居つたのでございます。たゞ話を長く引伸すのは、此人あたりから始つたやうです。

それで笑話は暫く天明度のそれ等の人の所で止めて置いて、其時分に笑話以外に可笑味のものがあるかと云ふと、是には最も大きなものがあるので、卽黃表紙でございます。此の黃表紙は黃表紙だけで御話する程の澤山の分量があるものですが、併し大ザッパに申せば是も特に論ずる程

えらい譯のものではありませぬ。黃表紙の方では京傳や喜三二などが腕を振つて居るので、此の方の可笑味は亦唯今まで申上げた短い笑話の類の可笑味とは亦違つて、例へば十枚にもあれ、十五枚にもあれ、それだけが纏つて可笑味を有つて居るのですから、佳いものは中々珍重すべきでございます。榮華の夢とか、長生未來記とか云ふ類のものは良いものであると云ふことが出來るでございませう。それで單に今まで申上げた笑話の類のバッとした一つの可笑い話でないところが黃表紙の勝れた點です。黃表紙一類には澤山の作を含有して居りますが、それがずつと續いて來て、種彥の地藏の道行に至つて其の打留になつて居りまする。併しそれから後も尙間を置いて、明治になつてまで、南新二とか或は幸堂得知とか云ふ方の書いたものもある位に、長く一つの勢力になつて居ります。又黃表紙と云ふものを除いて、他に何か可笑味のものが有りさうなものだと云つて搜して見れば、これと云ふものもありませぬが、川柳と云ふものが起つて參りました。是は元祿あたりの前句附と云ふ事から段々に起つて來たのでありませう。此の川柳の一派には、大變をかしい佳いものを有つて居りますが、要するに是も唯單に一句で終つて仕舞ふのでありますから、立派な良いものとして賞讃する程にはいかないのであります。

それから前に御話した歌の本末を附合ふやうなことから系統を引いて來たり、戯咲歌俳諧歌から系統を引いて來たりして、狂歌と云ふものが天明度には發達して來て居ります。それで狂歌の方にも可笑いものがボツ〳〵ありますが、是も取立てて言ふ程のものはありませぬ。

又淨瑠璃のやうな形を有つて居るもので可笑いのは、馬琴の書きました丑滿の鐘とか、或は風來の書いた褥合戰とか云ふものがある。殊に褥合戰に至つては馬鹿氣たものでありますが、餘り馬鹿氣た事を書いた結果、愚劣な可笑味になつて居ります。此の褥合戰と體裁を異にして性質を同じくして居るものの中には、隨分可笑いもの、たとへば榮華男の類の書が澤山あるのでございますが、これは談話の材料とは爲しにくいものです。

さう云ふ風に可笑い所の文學も段々と分科が出來て來ましたが、其後此の笑話の方はどうなつたかと云ふと、笑話の方はそれから後、別に是と云ふこともなくして始終續いて居りましたが、林家正藏、それから三笑亭可樂、是等の者が出るに至つて、樣子が自然に變つてまゐりました。此の正藏だの可樂だのと云ふ者は、話の調子をずつと變へて來たので、前に例に擧げました二三の例、卽ち言葉の手づまでない方の可笑味を棄てて、笑話といふものを言葉の手づまの方へ持つて

行つたのです。卽ち折角駄洒落を離れたものを又竹取以來の駄洒落の方へ、正藏だの可樂は近付けて行つたのです。正藏の拵へたのは太鼓の林とか、年中行事とか云ふやうなものが幾種かあります。此人の作は皆必ずしも殘らず言文一致に行つて居るのでありませぬが、當時の實際の俗語を少し氣取つて書いて居るといふやり方ですから、言文の關係をいふ時には正藏は一寸おもひ出される人です。

正藏の笑話の仕方と云ふのは、例へば杜鵑の話で、或畫家が杜鵑を寫生しやうと思つて山へ行つた、所が杜鵑が飛んで居ても早い爲に寫すことが出來ない、そこで畫工が、昔の人も鈴鹿山や金澤では筆を捨てたので筆捨の松といふ古跡を殘したと云ふことがあるが、ヤレ〳〵おれにも杜鵑は畫けぬ、筆を捨てやうかしらんと、歎息すると、杜鵑が頭の上で先生描けたか〳〵と言つたと云ふのです。是は可笑味はありますが、一番初に言つた駄洒落に復つて來たのです。趣味の墮落と謂つても宜いのです。浮世繪でも何でも天明は立派な美しさを有つて居りますが、それが段段年が經つに從つて墮落をして居ります。宜しくない傾向を現して居ります。それと同じやうに正藏なども其の墮落を現して居ると云つても宜いのです。

三笑亭可樂なども正藏と共に話をだらしなく長く仕た人です。可樂は三題話の工夫者として、今でも稱する所でありますが、三題話と云ふ事は餘り面白くない事で、結び題で歌をよむよりもまだ面白くない事です。三題寄せ集めて巧く處理したから妙だなどといふは、料理人が寄鍋でもこしらへや仕ますまいし、甚だ愚なことでございます。

正藏の作つた話の中で、牛ほめと云つて牛を褒める話などは、今でも落語家などがやる話であります。今寄席でやる笑話は多く、正藏可樂あたりの作つたものの變形でございますから、良い價打を有つて居らぬのも又明かでございます。

それで可樂正藏等は、笑話の方をさう云ふやうにしましたし、三題話などは、生活に困らぬ素人を味方にして段々に行はれてまゐりました。其の爲に、段々と話は小な所へ落ちて來て、明治の初圓朝が拵へました三扇などと云ふものを見ますと、こんなにも笑話の趣味は墮落したかと歎ぜられる位です。つまり話の一番いけなくなつた標本を現して居ると言つても宜い位であります。圓朝は人情話では古今第一の成功をしたのですが、をかしみの話の方では成功したと云ふ譯にはいかないのでございます。

是等の事を除いて其の他の方面を見ますと、名高い膝栗毛などと云ふものがございます。此の膝栗毛などのやり方は、人物を拵へてこれに在來の笑話を附けたものでございます。可笑な小な幾個の話を、旅行と云ふ一つの筋へ繋げて行つたので、此のやり方は古くからあるのであります。卽ち古い所で、竹齋と云ふのがございます。此の竹齋の中に、吸出し膏藥の功を信ずる者が、井戸へ落ちたものを揚げるのに、戸板へ吸出し膏藥を貼つて、さうして井戸へ蓋をするといふ事が書いてありますが、さう云ふ馬鹿氣た人物——卽ち竹齋といふ藪醫者の旅行記ですからをかしいにはちがひありませぬ。膝栗毛などは大體に於て其のやり方をやつて居るので、何も一九が竹齋を眞似たといふ譯ではありませぬが、膝栗毛は竹齋の系統を引いて居ると云つても宜いのであります。其の外に三馬といふ者が出てをります。此三馬と云ふのは別に大才が有るのでもないのですが、唯單に目前の情景を旨く畫のやうに取つて書表すことは甚だ上手です。卽浮世風呂とか浮世床とかいふ質のものを書いたのですが、是等には自然と滑稽が宿つて居るのでございます。

前に申したのは皆心に訴へる可笑味の方でございますが、こればかりでなく半分は目に訴へるやうにしてやつたのは京傳でございます。前に申した黃表紙もさうです。あれは必ずしも文章ば

かりで面白いのではなく、其の中には可笑な畫を入れ、其の畫がひどく人を刺激するもので可笑味を覺えられるのであります。さう云ふ類の外にまだ一種京傳のやつたもので、奇妙圖彙小紋雅話、あふむ石などといふのがあります。併し此等は文學からは既に脫して居るといつてもよいのです。

又天明あたりは古いものを攻究することが大に流行りまして、何は何である彼であると云つて、やかましき註釋や何かが大流行でした。そこで百人一首に向つて京傳がふざけた註を加へて初衣抄と云ふのを拵へました。あの千早振神世もきかずの歌を解釋して、立田川といふ角力取が豆腐屋になつたといふ話もそれにあるのでして、かういふものは餘計無いやうでありますが、一種の可笑味を以て無理に註釋をしたので、明治になつての正太夫の小說評註などと云ふのは、期せずして、似たやり方を以てやつて居るのです。此等の外に地口とか謎とか或は判じ物とか當話とか云ふ一寸としたをかしみの種類のものが澤山あります。判じ物などは何時頃から始つたものか分りませぬが、既に享保あたりに於て或は綺麗な本が出來て居たりします。又地口や謎の類も其の通りで、幾部かの本が百年かもう少し前から出來て居ります。當話問答といふのは、女の病に血の

道あつて天に天の道なきは如何といふ問に答へて、てんかんといふ病あつて地かんなきがごとしといふ類で、當話問答だの、聞はつりだのといふものが數部あるやうです。これも百年以上古いのです。

此等の外にまた他の一面に茶番と云ふことが始つて來ました。素人が滑稽の芝居のやうなことをして、さうして自ら喜ぶ、是は演劇道から起つて、素人の間に盛になつて、天明以後文化文政あたり、人が遊んで居て無事に苦んで居るやうな場合に行はれたのです。此の茶番の失敗などに自然をかしい面白い事が出來たので、八笑人とか、和合人とか、七偏人とか云ふやうな、遊ぶのを商賣にして居る者を主人公として書かれた滑稽物が出來ました。是等も可笑味はありますが、中には書かれて居る人物か、唯可笑い事をする爲に生きて居るやうになるので、却て面白味が少く感ぜられます。

此の外に批評的に可笑いものを書いたのは、三馬の忠臣藏變痴奇論のやうなものが幾らかあつて、わざと人が惡いと云ふ事を善いと言つて見たり、善いといふ人を惡いと言つて見たり、引く り返して可笑くするのであります。是等の類も幾らかありますが、さう云ふのは一系統立派に持

つて威張るに足る程に成功しなかつたやうであります。

前に狂言の事を申しましたが、狂言は時代が經つに從つて、幾らか隔靴搔痒の形になつて來る、それが爲に狂言以外に矢張幾らか狂言に基いて變形したものが出來て來ました。それは照葉狂言とか或は「大阪にはか」のやうな類で、一概に狂言からばかり出たとも言ふことは出來ぬのであります。

ざつと今御話した所で可笑い事を主としてやつて居るものは、さう餘計形は無いのであります。一體我々日本人は笑ふことが嫌ひなので、それで元祿あたりに近松のやうな好い作者があつても笑ふことに付て面白いものが無いのでありませう歟。或はそのために、天明あたりへ來ても矢張立派な可笑なものがないのでせうかと云ふと、必ずしもさうは言へぬのです。何故さうは言へぬかと云ふと、それでは日本人は笑ふことが嫌ひだから滑稽の佳作がないと云ふならば、然らば、或は他の方面に立派な良いものが澤山出來て居るかと云ふと、さうもいかぬのです、悲劇的のものだつてそんなに佳いものはありませぬ。さうすれば滑稽の佳いものが出來て居ないと云ふのは笑ふ事が嫌ひなためだとも云へないではありませんか。それは唯自然に出來なかつたので、別に

特殊な理由をそれに向つて附ける必要はなからうと思ふのです。却て日本人が笑ふことの好きな證據には、零細なものでなんでも笑を催させる文學が澤山にある所を以て見ても知れるのです。殊に時世の上に付て一寸した笑話を作るなどと云ふことは、日本人の長所ではあるまいかと思ふのです。天保あたりは前に申した趣味の墮落して居る時でありまして、笑話の本なども、面白くない言葉の手づまばかりを多く載せて居る時であります。其の時分の事ですから仕方がありませぬが、天保十二年に水野越前と云ふ人が、種々改革や何かをしました時に、大變に世人の感情を害しました。其の時分に出來た笑話に、誰が作つたと云ふことは分りませぬが、水野を罵つた笑話がいくらもあります。そんなものを見ても、如何に普通一般の人が悲觀的憤怒的ばかりに心を動しては居ないで、他の一面には笑に付て趣味を有つて居るかと云ふことが分るのであります。一つ例を擧ぐれば、水野越前は始終頭の結ひやうが變つて、ハヶ先が長くなつたり又短くなつたり、いろ〳〵になる。そこで人がどういふ譯でいろ〳〵な髪を結つてお居でになると云ふと、イヤおれの髪はむづかしいから、どうも——家來始め越前のかみを能くいふものがない。と斯ういふのです。是は詰り水野の人望を言つたのです。又も一ッ例を申せば、子供が天下大變天下大變と

言つて居るので、何故そんな事を言ふ天下太平といへばよいにといふと、それでもしたが廻らないから、なんどと巧く落して居ります。或は又日光へ行つた歸りに水野が水戸家へ立寄つた。水戸家でもつて大身の槍を水野に下すつた。水野がどういふ譯で大身の槍を下さいますかと伺ふと水戸樣が、イヤ貴樣はおもひやりがあるまいからと仰しやつた。といふ笑話もあります。是等は皆詰らぬ言葉の手づまではありますけれども、併し一體に誰でもが笑話を好んで、現在の實感に對しても、それを笑話の材料にするほどの度量のあるのは感心ではありませんか。

併し我が邦の滑稽の文學はまだどうも立派なものを有つて居らぬのです。日本の滑稽作者に誰を推したら好いのですか、誰も無いではありませんか。私の見る所が狹くて、私の斷言が間違つて居ると言はれるかも知れませぬ。併し私の考へた所では今までの所では、好い滑稽の作は無いやうです。

さりながら今までの歷史が好いものが無いからして、是から先も好いものが出來まいとか、さう云ふ事を斷言するのは無益なことであらうと私は考へまする。我々は勿論歷史と云ふものを尊重しなければならぬ、歷史を濫に破壞する所の力を有つては居らぬ、併ながら我々は歷史の子孫

で、決して歷史の奴隸ではないのであります。是までの事實は事實、過去は過去です、祖先は祖先です、我々は我々です。今迄がこれ〳〵であるから今後も必ず今まで通りといふ道理はないのであります。我々は是から先立派なる滑稽の文學を有するやうになることが出來るかも知れぬのであります。元來笑と云ふものは何でありませう、是は詰り涙とか腹立とか云ふやうなものの他の一面ではないのですか。谷が深いやうで無ければ山は高くありませぬ。非常に强い苦悶があれば或は上品な笑も出て來るのでせうが、唯何の事も無くして平和安樂の所へ突然に好い笑が出來て來なからうと云ふことは、寧然るべき筈の理窟ではございませんか。天明や元祿は別に大した苦みや悲みや煩悶を持つて居る時代とは言へますまい。もし此判斷にして過らずば、是等の時代の人が大變に貴い笑の文學を作らずに了つたのは、別に不思議は無いではありませぬか。併しどうしても笑は必要のものであります。笑は人間の安全瓣ででもあるでございませう。それでおのづから文學の上に於ても滑稽の好いものがなければなりませぬ、それは人間が必要とするところであります。固より人生泣いてばかり居る譯にいかず、又怒つてばかり居る譯にもいきませぬ。泣くべき時は十分に泣かねばなりませぬ、怒るべき時は眞劍に怒らねばなりませぬ。それと同じやう

に、笑ふ時には笑ふのを惜んではならぬ、立派な笑を持つやうにしなければならぬ。必ず清かな溫かな笑がなければならぬ。もし涙の無いのが鬼だとか云ふならば笑の無いのも矢張鬼でなければならぬ。非常に大きな傾を一面に持つて居れば、又他の一面にもそれと異つた大きな傾がなければならぬ。肴屋がおろした魚のやうに半ぺらしか無いといふ人は無いのである。立派な悲劇的文學の對側には立派な滑稽文學が必ず無くてはならぬのであるから、笑を傳へる立派な文學が無くては濟まぬ道理です。斯う云ふやうに考へて見ると、今までの多くの人が笑つて居つた所は實に僅の笑であつたので、それは在來の日本人の感情が深刻に手強くなかつた結果として、今までの滑稽の作品も皆微なものであつたと言つても宜いので、是から先は必ずさう云ふのでないもの——卽ち尊ぶべき佳い滑稽文學も出て來るであらうと思ひます。立派な涙は何であるかと云ふと、詰り感情の深い溪の美しい水です。立派な怒と云ふのは何であるかといふと、道義の念の燃え上る壯な熱ではありませんか。さて立派な笑と云ふのはさう云ふ熱でも水でもない、さう云ふものの或調和を得たところに咲く優麗美妙な一つの或美しい華ではありますまいか。(甲辰)

浮世繪

廣重

徳川期に於ける數多き浮世繪畫家のうち、色彩を異にしたものに廣重がある。廣重は邦人に持囃されたるよりも寧ろ海外で評判をとつた。英の繪畫界に偉大な勢力を有せるホイスラーの如きは。廣重を稱揚し、且自ら廣重の風景畫の數多く散つてゐる圖を描いて、其の間に美人を置いた畫などを描いたので、廣重の名は忽に泰西の畫壇に馳せ、一時に重きをなした。

由來浮世繪は、風俗、人物——殊に美人を描く畫であると云ふやうに一般に思はれてゐたが、廣重は其の畫題を他の畫家と異にし、風俗を寫さず、人物を描かず、好んで山水を撰んだので、浮世繪の上に一新局面を開いたのである。然も廣重が、徳川期に於ける他の有名な浮世繪師に比して拔群の技倆を持つてゐたかどうかは疑問だが、兎に角浮世繪の中に別に一天地を開いたのは其の特色で、確に一種の才があつたに違ない。それでホイスラーを首として、今日の西人の間に珍重されてゐるのであるが、生前に於ても既に一般から、技倆ある特殊の浮世繪師として知られて

るたのである。

廣重の師は豐廣である。豐廣が物故した時、當時の習慣として、門生中の誰かに其の名を繼がせると云ふ問題が起つた。第一に廣重が其の候補者に選ばれたのだが、廣重は、豐廣が最も得意としてゐた美人畫には餘り得意では無かつたので、自己が師の名を汚すのを厭ひ、二代目豐廣となる事を固辭して、飄然漫遊の途に上つた。これが彼の精神の清い、一風ある面白い所で、普通のものなら技倆の有無は問はず、師の名を繼ぐのを名譽とするのだが、彼はそれを顧みなかつた。かくて四方に放浪して技を煙霞の間に練り、在來の山水畫以外に、別に一派の風景畫を立てた。

元來浮世繪は土佐派から出たもので、又狩野風の美人畫を參酌してゐる形跡があるが、其の特色は系統的、因襲的、歴史的のものでなくして、寧ろ新しき技術と云ふ點にあつた。其の貴族的ならずして平民的で、前代藝術の權威の餘光を借りない所に藝術としての浮世繪の價値があつたのである。浮世繪の山水は、狩野土佐から見ると、弱い、低い、卑しいものかも知れない。然し舊套を脱して別に一新天地を開いた所に浮世繪の特長があるのである。廣重出でて山水を描くまでは、山水畫と云へば狩野派などの專有で、決して浮世繪の領分ではなかつた。廣重が出て、描き

だした浮世繪の山水は、土佐や住吉の公卿流の古代のものでもなく、湘瀟八景のやうな唐樣の風景でもなく、全く當時の實物を寫した眞の日本の景色であつた。

廣重以前に既に北齋なども浮世繪流の風景畫を試みてゐるが、それは餘感心できぬもので、廣重のものとは比較にならない。豐廣も早く風景畫に指を染めて、美人畫の付立などに、他の浮世繪よりは親切に筆を執つてゐた。云はば廣重の前驅をなしたものである。然し風景を浮世繪で大成の域に近づけたのは全く廣重の力である。廣重の畫風は餘程洋畫の影響を受けてゐる。蓋し西洋畫を參酌して自分の壺に熔かし入れたものと云へる。其の色彩の用ゐ方にしても、大膽にして象徴的な所などは、西洋系統を引いて居ると云ふ事を人に氣づかせない原因になつてゐるが、仔細に觀察すると尠からず洋畫風の遺口が見える。

要するに廣重は風景畫に於て寫實を重んじたのである、前代藝術以外に、一地域を開かんとしたのである、阿蘭陀畫風を消化したのである、それ等の隱れた努力が、今日の歐洲の眼ある畫家に認められた原因となつたのであつた。

懷月堂は一代であつたか、數代つゞいたものか、單に畫風だけでは判明しない。其の畫風と云ふのが極めて單調極る、丸で版木で起したやうな美人畫で、其の美人も凡て靜的なもので複雜な動作を現してゐるものは一つも見受けない。時に髮を理めてゐる位の動作のものは見受けぬのでもないが、多く一樣の立姿である。

懷月堂の一系統は浮世繪中最も不明なもので、前世も不明なれば後代も不明だ。殊に落款が數種に書かれてゐるので、數代同じ堂名の畫家が續いたとも見られるし又落款の書體が殆んど一人が書いたやうに思はれる節から推すと、數代同じ堂名が續いたものとも考へられないのである。其の畫風は、どれも同じやうな脹れた顏の美人が、思ひ切つた太い線で描かれ、大膽な色彩で塗られたものである。それが亦一樣に尊大傲慢な態度をしてゐて、女らしい他の情緒は現れてゐない。然し服裝の模樣には他に見る事の出來ぬ豪放な面白味があつて、大に研究に價する。

懷月堂は一人であつたか、數人であつたか、明かには知れないが、恐く專門の畫工ではなかつたのであらう。もし專門の畫工だつたとすれば、あんな單調な、何時も版木で起したやうなもの計り描いてゐて、どうして自家の活計が立てられたか頗る疑問とせざるを得ない。さればと云つて

全然素人でなかつたと云ふ事は、其の筆の達者な點に於ても直に認める事が出來る。それに懷月堂の畫風は、後の榮之などのやうな纖弱極るものとは反對に、豐麗遒勁なもので、色彩も濃厚なものであるから、人目を引くを主とする廣告畫になど用ゐるには最も適當である。

或說には、俳諧師であつたとも傳へるが確證はない、多分は專門の畫家で立つた譯ではなく、と云つて全然素人でもなく、他に何かの職業を營んで、繪は半商賣にやつてゐたものかも知れない元々彼の畫風は、餘にしつこいのと、題材が單調なのとで、多くの人から喜ばれたものとも思へない。然し其の大膽な筆力と思ひ切つた著色とは、確に一種の特長で、祐信などに比較すると決して下位にある可きものではない。殊に畫面の中に潛む異樣な力と、其の人物の履歷、及び畫系の分明せぬことが、人の興味を引くのである。

葛飾北齋

葛飾北齋が、浮世繪師中の巨擘である事は、今日誰も異論のない所だが、板畫に於ての色彩組立、卽ち色を以て調子を現はす技量に至つては、其の長所であつたかどうか頗る疑はしいものがある。色彩を巧に用ゐたのでは、北齋よりも前に世に現れた鈴木春信、鳥居清長、清倍などが遙に

勝れてゐたやうだ。殊に僅少な色彩を用ゐて極めて豐富な趣を描き出した點に於て、春信の才は實に驚く可きものがある。

板畫の行はれ出した初期に於ては、多種多樣の色彩を用ゐる事は頗る至難な業であつた。そこで繪師の方でも出來るだけ色の種類を制限して、成る可く版畫に適するやうに工夫せねばならなかつた。此不自然な遣方は、未發達時代に於ては窓に已むを得ぬ道程で、繪師にとつては甚迷惑な事であつたらうと思ふ。然し艱苦困難は何時の時代に於ても、天才者にとつて滋養物とこそなれ、害毒物とはならなかつた。殊に浮世繪發達史上に於て、此眞理が尤も明晰に認め得られるのである。多種の色料を用ゐて豐富な趣を描き出すのは當然の事で、格別畫家の名譽でもないが、比較的少い色を用ゐて比較的豐な妙味を現すのは全く卓絶した技量を待たねばならぬ。彼の卓絶せる劍客が、短劍を以て尙長劍を執れると同じく働くが如く、更に一段卓絶せる劍客が、赤手空拳にして尙且鋭鋒利刀を持ちたると等しく縱横に働き得るが如く、勝れたる才能ある畫工は、貧しき材料を以て極めて有效なる結果を收め得るのである。春信等が成し遂げた功績は、限られたる範圍の材料を以て自由な製作を試みた點にあるのである。卽彼等は苦境に際して一層練磨の功

を積み、天才の光輝をより以上に發揮したものだ。

既に北齋の時代になると、前代に比して印刷術は長足の進歩をして、版畫の色彩も頗る自由に成し得られるやうになつた。然るに北齋が、比較的多くの色を用ゐて、比較的豐でない結果を收めてゐると云ふことは、あながち春信最晨のみの發する非難ではない。それに北齋より彼の豐國、國貞などに至つては、益〻豐富な色彩を用ゐて益〻貧弱な結果を招いてゐる。卽ち浮世繪の尤も衰退せる時代は、印刷術の最も進歩した時代であると云つても決して誣言ではないのである。

北齋は其の中間にあるもので、春信等に比較すれば色彩を用ゐる事は拙だが、彼の豐國などから見ると遠く上位にある者だ。譬へて云へば、春信等は劍客の短劍を以て常に勝を占むるが如く北齋は長短手頃の劍を以て辛うじて勝ち得るが如く、豐國等に至つては好んで長劍を用ゐる未熟の劍客の如きものだ。

北齋に尤も驚嘆す可き技量のあるのは、線又は點の如き、筆力のみを用ゐ、單色のみを用ゐて、或情緒を極めて自由に表した事だ。此點に於ては蓋し浮世繪師中、北齋の右に出づるものは殆どないと思ふ。勿論北齋には生れながらにして天稟の大才があつたに違ないが、其の絶大の精力を

以てあらゆる流派畫風に出入し、窺はざるものなく究めざる所なき實に恐る可き修養練磨の力が、遂に彼をして大を成さしめたのである。北齋は年若き頃は可成柔かい線を用ゐてゐた、中年後、次第に筆に强味が生じて剛健な趣を現して來た。末年には强味の弊をさへ生じた位だ。殊に點の應用は他の浮世繪師の多く試みなかつた所だが、彼は之を尤も深く研究して、相應の結果を收めてゐる。

北齋の大成したのは、全く努めて屈せざる意志の力である。彼の精力は殆ど無限と云ふ狀態で常に四肢五體に横溢してゐた。例へば他人が百線を描き千點を打つ場合は、彼は二百線を描き二千點を打つと云ふ遣方であつた。他人よりも數倍エナジーを持つて生れた男だつたのだ。だから彼には勞苦を厭うた箇所が見えない。由來天才者と云ふものは、懶惰放逸、勞苦を避けるのを以て能事であるかの如く心得るものであるが、北齋に至つては其の缺點は塵程もなかつた。畫家の言葉に「逃げる」と云ふ語がある、即ち出來るだけ筆數を減じて手數を省くの謂だ。餘り筆數のみを多く使つても、蕪雜に落ちては稱するに足らぬが、と云つて所謂「逃げる」事にのみ腐心するのは感心す可き事ではない。北齋には殆ど「逃げる」と云ふ事はなかつた。行く所まで行く、遣

る所まで遣ると云ふ極めて徹底した力があつた。北齋がまだ若い頃描いた塵劫記に擬した草双紙がある。それを見ると、鼠算や繼子算の繪がある。普通の繪師が描けば、鼠算には數疋の鼠、繼子算には數人の兒供を寫してそれで胡魔化して置く所だが、北齋は例の精力主義で幾十幾百となく鼠を描き、念に念を入れて數多くの兒供を描いてゐる。其の一つ〳〵にも充分努力の跡が現れてゐる。これは數〻予の談るところであるが、實に予の感心してゐる一事例だ。

北齋の描いたもののうち、尤も手數をかけなかつたと思はれるやうな挿畫などをとつて、今日の畫家の手に成つたものと比較するに、今日の畫家が如何に「逃げる」事にのみ腐心してゐるか、即ち勞苦を回避する事にのみ心を用ゐてゐるかと云ふ事が思はれるのである。それに引代へて北齋は一點一劃にも苦心のあとを示してゐる。北齋の筆意は俗臭を免れないが、其の力に至つては、他人の到底摸す可からざる强味と長所があつた。蓋し北齋が絶代の大家として後世に仰望せらるる素因は、苟も勞苦を避けなかつたと云ふ努力主義の賜物であると思ふ。

京傳の繪

文學と繪畫の兩刀遣は古來尠くないが、俗文に堪能であつて、浮世繪に指を染めて居つたも

のでは、先京傳を其の首位に推さねばなるまい。京傳は元來才子肌の男で、當時文學上の地位は馬琴よりも一歩先立つてゐた。馬琴に比較すると、識見、筆力、學殖の點は遠く及ばなかつたものかも知れぬが、文の妙味に至つては、ふくみ、軟かみ、潤ひが十分あつて、遙に馬琴の上にあると思ふ、たゞ男性的の硬い味が馬琴に比して劣るのである。

實際の人生に觸れて居る點に於ては、馬琴にも可なり深刻な處があるが、京傳の方が更に廣く、眞の味を嚙みしめてゐるやうなところがある。殊に其の犀利な觀察に種々な想像を加へて、作り上げた滑稽などは、到底馬琴の敵ではない。全く京傳のユーモアーは別人の眞似の出來ぬものである。彼より少し先輩の岡持にも少からぬ諧謔があつたが、然し彼には及ばぬものだ。もし京傳をして單なる稗史の作者たらしめず、今日流行してゐるパックなどの編輯でもさせたら、それこそ天下一品のものを拵へたに違ない。明治時代で尤も京傳に似たものを求めれば先饗庭篁村氏であらう。京傳は恰も氏のやうな型で、多少異つて且秀でて居つた人間のやうに考へられる。

京傳は浮世繪を北尾紅翠齋に學んだ。其の畫風は軟か味の勝つた、頗る上品な、そして含蓄の深いものである。畫名は師の名の一字を貰つて政演と名乘つてゐた。京傳の肉筆は今日なほ傳つ

てゐる。運筆は云ふまでもなく、著色の手腕も素人離れがしてゐる。當年の繪師の群にあつても秀れた一人であつたらうと思ふ。

此點に一つ不思議な位對照のとれないのは、俗文に於ける京傳には、洒脫にして滑稽味を帶びた他人の窺知を許さぬ京傳一流の筆致があるが、其の筆に成る浮世繪には尠しも京傳らしい獨特の箇所がなく、文に比して殆ど別人の感がある。蓋し彼は文學には初から可なりの苦心を積んだが、繪畫ではまだ自家の長所を發揮する所まで進まずに終つたのかも知れない。文には一行の末にも如何にも京傳らしい片影が潛んでゐるが、繪はたゞおんもりした感じを與へるに過ぎぬ。若し彼が今一段畫技に熱中して更に一歩進め得たなら、必ず其の文に於けるが如く、大に刮目す可きものがあつたらうと思ふ。

文學と繪畫とを兼ねた人には、京傳より前に雛屋立圃と云ふのがある。立圃は極めて古風な土佐がかつた浮世繪を描いた人で、俳諧にも名を成してゐた。其の繪は今日から見れば、價はするが然程では無い。が、立圃の名は俳諧の歷史には忘れ難い一人なのである。京傳よりやゝ遲れて窪俊滿が出てゐる。此も俗文に浮世繪を兼ねた人だが、文はたゞ器用であつたと云ふの外、此と

云ふ異彩はなかつた。而し狂歌は一時の秀で、京傳よりも遙に巧であつた。殊に畫才には中々富んでゐて、筆に鋭い箇所もあれば、華奢な箇所もあつて、可なり變化もあつた。俊滿は又彫刻の技にも秀れてゐて、自分で繪を描き、狂歌を題し、之を木竹に彫刻しやうと云ふ風な多才多藝の男であつた。京傳を中にして、前に立圃あり、後に俊滿あり、好箇の三幅對である。

彌治喜太で有名な十返舍一九も、他人に負けぬ多藝で、何でもする男であつた。繪も自著の版下位は描き、書も筆工位は遣つた。然し孰の技も皆其の文學に於ける程度のもので、低級な、道化じみた、下品なものであつた。第一其の一代の傑作が膝栗毛に指を屈せねばならぬ所から推しても凡ての想像はつく。殊に繪は下手もので、俊滿の脚下へだに及ばぬものだ。馬琴、種彦なども版下の指圖位は出來たが、繪らしい繪は描けなかつた。京傳は初のうちは繪畫を以て世に立つ考でゐたかと思はれる節がある位である。

北齋の文

京傳は文から畫を兼ねた人だが、畫から文を兼ね——若くは兼ねんとしたのは葛飾北齋である。北齋は晩年に及んでも著述に志を斷たなかつたやうな點が見える、若い頃は畫工としてでなく、

文筆を以て立つ考であつたかも知れない。當年馬琴と喧嘩したと云ふ話もあるが、元來が文學好きで、其の方にも可なり通じて居つたから、馬琴のであらうが誰のであらうが、他人の作物を忌憚なく批評し、褒めもすれば貶しもしたに違ひない。馬琴と衝突する位は、北齋として爲し得る所と思ふ。然し彼の文に於けると、京傳の丹青に於けるとは、其の程度は比較にならない。京傳の繪に於ける造詣の方が遙に深いものがある。

抱一上人なども俳諧と繪とを兼ねてゐたが、外にも數へたてれば、文、畫の兩刀遣は澤山にある。漢學者で南畫を能くした大家なども數多くある。然し俗文と浮世繪とを兼ねた所謂彈語は先當時では、京傳、北齋あたりに指を屈しねばなるまい。

復讎譚

我が邦の地勢たるや、山峻にして水急である。其爲といふのでも有るまいが、人の心狀もまた峻急のところが多い。支那の莊列のやうな思想をあらはしたり、司馬懿や謝安のやうな事蹟を遺したりなどしてゐる例は少くて、伍子胥や岳飛のやうな英雄を愛し、孟子や韓退之のやうな賢哲を尙ぶ傾は多い。そして國民の文學は國民の性情を反映してゐるものとすれば、少しも無理の無いことであるが、文學の上にも亦激烈勇敢といふやうな事を尙んでゐる心の峻急な有樣は遺憾無く現れてゐる。試に古より邦人の愛好欣賞した文學が如何なるものであるかといふことを考へて見れば、實に明瞭なことである。もとより假作の物語の類の事であるから、隨分誇張の自由を縱にしてゐるのではあるが、いづれの書にか峻急なところの無いものが有らうと問ひたい位である。

平安朝期の文學、および其の系統の文學には、なるほど柔軟な情緒のみの漂うたものもあるが其の後のものは多くは然樣では無い、皆峻急のところが多いものである。忠勇義烈の談、至孝賢

貞の譚は非常なる執著と趣味とを以て國民の間に迎へられ、終に復讎譚は、其の父の爲、母の爲、君の爲、夫の爲たるに論無く、大に世に行はれて、我が邦の文學の野の大部分を領し了るに及んでゐる。復讎譚を日本文學から取除けば、餘すところは甚少いと云ひたい位である。予は日本文學より復讎譚を除いた他の一切の文學と復讎譚との其のいづれが國民の間に重視されてゐるで有らうかといふ事を、折に觸れては思ひ浮べるものである。水は必ず急流し、山は必らず峻峙して居る我が邦の人は、幾多の辛酸苦楚を喫しても、君父の讎は必ず報ゆるといふことに、非常の感歎と賞美とを寄せてゐたといふことだけは事實である。そして此の事實は彼の如き文學を產し又彼の如き文學は此の如き事實を生ぜしめたといふことも見逸し難いことである。此の點より觀るときは、復讎譚文學は、其の鄙俚なるものが多いといふの故を以つて蔑視することは出來ないのである。(辛亥)

洗心廣錄 終

大正十五年六月八日印刷
大正十五年六月十二日發行

定價金參圓八拾錢也

著者　幸田成行
發行者　東京市日本橋區本石町三丁目十四番地　加島虎吉
印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞

印刷所　凸版印刷株式會社

不許複製

洗心廣錄

發賣所

東京市日本橋區本石町三丁目　電話大手一二三六番　振替口座東京一七四四番　至誠堂書店
東京市日本橋區人形町通住吉町　電話浜花一九四九番　振替口座東京一六三六番　至誠堂第一分店
東京市本郷區本富士町二番地　電話小石川七五〇三番　振替口座東京一六九四番　至誠堂第二分店

杉村楚人冠先生著

湖畔叢書 第一編

著者一流の隨筆集

へちまのかは

今日著者一流の清新の文と洒脫の想とは一朝に成れるに非ず、正しく二十年煩悶の末に出づ、そのあゝでもなしかうでもなしと思ひ迷ひて遂に今日に至れる經路は、たゞこの書によつてのみ窺ふを得べし。凡そ書を學ぶ者は眞體を先にして行より草に入る。世の文を學ばんとする者は他の草體を見て、その眞より行に至れる苦心の跡に就て學ぶ所なかるべからず。

・新式三六版・三五六頁・
・總クロース製・頗美裝・
定價二圓五十錢
（郵稅金十錢）

湖畔叢書 第二編

清新輕妙の物語集

白馬城

「白馬城」はかつて讀書界の熱讀のまとたりし「弱者の爲に」を增減補正し、更に白馬城の記數篇を加へて、爽やかなる新味をふきこみたるもの、先生の出世作とも稱すべき「時子」をはじめ、幾多の物語めきたる長篇を收めたり。

先生の物語文には「へちまのかは」に出でたるが如き隨感隨筆の類と自ら異なる先生一流の妙趣あり。

・新式三六版・三七〇頁・
・布裝箱入・頗美裝・
定價二圓五十錢
（郵稅金十錢）

浪六全集

縮刷

新式ポイント組
袖珍箱入美本
各冊金二圓
（郵稅十錢）

浪六先生の傑作
興味津々の快著

縮刷合本 元祿四十七士 罵倒錄・放言錄
定價二圓二十錢（送料十二錢）
定價二圓二十錢（送料十二錢）

第一編	當世五人男	
第二編	當世五人男	黑田健次
第三編	當世五人男	上田力
第四編	當世五人男	倉橋幸藏
第五編	當世五人男	川上三吉
第六編	吉田雄藏・花車・しなさだめ	
第九編	人間學	
第十編	八軒長屋	
第十一編	八軒長屋（後）	
第十二編	八軒長屋（續）	
第十三編	仍如件	
第十六編	毒婦	
第二十編	無遠慮	
第廿三編	豐太閤・一文字	

縮刷合本 時代相
＝天金特製・至誠堂版＝
袖珍形箱入七百八十頁
定價金三圓也
（送料十二錢）

1528
カ 7

出版界獨歩の掌中書

■至誠堂編輯部編

掌中六法全書

斯界唯一の大增訂版

形體は小く薄く輕く紙質は强靭にして裝幀は極めて堅牢
印刷は特許印刷により驚異的鮮明しかも絶對に視力を疲勞せしめず、これ類書中本書のみが誇り得る特徴なり。
內容は豐富周密にして最新、常に改訂を怠らず、あらゆる點に極度の完全を竭したれば斷じて他書の追隨を許さず。

・新式小形・紙數八百餘頁・
・洋式爪掛栞紐附總革特製・
定價二圓五十錢
（書留送料十四錢）

掌中新辭典

東京帝大教授 文學博士 藤村作先生監修

現代語の綜合辭典

ポケットに、机の上に、鞄の中に、本書一冊あれば、國語、漢語、新造語、外來語等の意味は即座に解明し、忘れた文字、正しい假名遣は直ちに出て來る。手紙、文章、談話の上に便利萬能、現代人必備の活顧問なり本書の眞價は實物の一見に依つて首肯せられん。

・總革特製小形・
・六百五十餘頁・
定價一圓九十錢
（書留送料十四錢）

525
277

落